
生意気メガネ

愛内小夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生意気メガネ

【Nコード】

N1853Q

【作者名】

愛内小夜

【あらすじ】

入社早々倒産！

急場しのぎの予備校講師の仕事に飛びついたが、生意気な予備校生たちに翻弄されながら頑張ります。

恋愛経験のない志乃は仕掛けられた罠をかいくぐれるのか？？

年下男子とのお子ちゃま↓大人な恋愛モノです。

前夜

「マジで・・・？」

・・・小刻みに震えているのは寒さのせいだけではない。

確かにまだ都会の春は肌寒く、お気に入りのトレンチコートの裾を微かな風が揺らしているが。

私、桜井志乃は社会人1年目の春早々、内定していた会社が倒産！失業してしまったのである！！！！？

+++++

雪深い田舎から引越してきて早々の惨事に呆然としていたところ、数年前に上京していた従姉の今日子が救いの手を差し伸べてくれた。

今日子はとある超進学予備校の事務員をしている。

受験戦争というものはいまだに健在らしく、その予備校も満員御礼、ウハウハであるが故の悩み、講師不足に陥っていた。

そこで私に白羽の矢がたったということだ。

「捨てる神あれば救う神ありだね☆」お茶目な従姉が明るく笑っている。

今となっては失業と言う憂き目に合っているが、腐っても国立大卒・工学部の化学乙女な私に、

「大学入学希望コース」を任せようと言うのだ！

「はあ・・・←」

人に勉強を教えるなど、とんと経験したことのない私は、初め躊躇した。

しかし上京して間もない、高い家賃・日々減っていく貯金に困窮した私は、

その話を聞いた翌日、その予備校に足を踏み入れた。

+++++

「なんか病院みたいだね・・・。」これが第一印象。自然と声も潜まる。

ただし、独特の消毒臭さはなく、たまに見かける講師のような人も白衣ではない。

「ああ、新しいからね」小さく笑った今日子に、校長に挨拶に行くと案内されていく。

この時期、受験戦争も一段落したからなのか、行き交う人は少ない。偶に酷く思いつめた顔をした子を見かけて気の毒に思う。

私は塾や予備校といったものに通うことなく、家から一番近い国立大に行った。

お金がかからなくて、模試でA判定だったからだ。

国立大と言っても、田舎の大した事ない学力で行ける所だったが、国立大と言うだけである程度の称賛を得た。

そんな私が、それほど年の変わらない死ぬ気で勉強しているかもしれない子を

相手にして大丈夫だろうかと不安を感じた。

校長室に向かう途中、異質な音を耳にし、目を向けた。

自販機とベンチがある窓辺、窓から入る逆行の中に少年がいた。

音は少年のイヤホンから漏れ出ているようだった。少年は目を瞑り俯いて脱力している。

勉強に疲れて休憩中だろうか・・・ほんの2・3秒で観察・判断したが、

すぐにこれから校長に挨拶しなければならぬという事態に緊張が甦った。

校長室に入ると、意外に若いお洒落な男性が出迎えてくれた。

洗練された雰囲気と高そうな時計に、予備校と言うのは大変儲かるらしい

という記事を昔読んだことがあるのを思い出した。

ダンディー校長は薫り高いコーヒーを出してくれて世間話を始めた。コーヒーが苦手な私は申し訳程度に口をつけて、相槌をうった。

挨拶・面談というより世間話を30分程度したら、「じゃあ、桜井さん頑張つてね!」と肩をポンポンされた。

予め履歴書に目を通し、私の情けない事情を今日に聞いていたようだ。

「じゃあ、校内を案内するね。そしたら講師の人達に挨拶して今日は終わり!」

早速明日から来て欲しいってさ。8時からだから、10分前には来てね。」

・・・予備校って夜だけだと思ってた。そう言ったら、自習室は常時開放されており、

解からない事をすぐに講師に聞けるようにしているらしい。

最新設備に驚かされながらの見学後、講義前の講師達にも挨拶を終

えその日は帰った。

前夜（後書き）

初書きです。

R15内で頑張ります。

ラストまでまだ考えてませんが、最後まで書ききることを目標にしています。

第一夜

ちよっぴり緊張している。

服装は大丈夫だろうか？

昨日講師達に挨拶したときに観察した感じでは、皆割と若く、20代後半から40歳くらいまでといったところで、特に若い講師達はラフな服装であった気がした。

さすがに初日からトレーナーにジーンパンでは拙かろうと、選んだのは明るいミントブルーのアンサンブルに濃いグレーのフレアスカートである。

・・・好感度重視の無難なファッションだと思っているが、自分のセンスに自信はない。

残念ながら工学部女子にお洒落の必要などなかったのである。

ガラリ！「おはようございます」

15分前だからか、講師の数は少ない。

今日子もまだ来ていないようだ。

キョロリと視線を巡らすと、同じ歳くらいの男性が立ち上がり手招きをした。

「おはようございます。席、こっちです。」

ジャーニーズ事務所にでも居そうな、童顔の茶髪青年に近づき挨拶した。この人昨日いたっけか？

「桜井です。今日からよろしくお願いします。」

にっこり微笑む。第一印象は大事だ。

「大宮和志です。よろしく願います。桜井先生、23ですよ？俺も同じ年なんです。下っ端同士、一緒に頑張りましょう」

同じ『新入社員』というわけだ。

気合を入れてるからスーツなのだろうか？ キッチリネクタイまで締めている。

なるべくうるさくないといいな・・・と微笑みながら頷いた。

「大宮先生は何を教えていらっしゃるんですか？」 社交辞令として会話を展開した。

「古文・漢文です。桜井先生は化学なんですよ？ すごいですね、俺はそっち全然で・・・」

照れくさそうに無邪気に笑っている。

女性で理系だとかかなりの確率で「すごい」と言われるが、別にすごい。

誰にでも得意分野はあるのだ。現に、年々工学部の女子比率は上がってきている。

まあ、それでも私の同期の女子比率は1割程度だが・・・。

電子・機械系に較べたらマシだ。向こうの学科では女子は200人中4人だと聞いた。

・・・耐えられそうもない。

そんなこんなで8時のブザーが鳴る。

あれから15分経っても、講師室にいる講師は7名程度だ。教室数の割には少なくないか？

「15時までは自習室で質問を受け付けます。桜井先生は今日はA-3教室の当番です。」

なぬ！？ わからない質問をされたらどうするのだ？

さすがに大学受験レベルの数学は忘れ気味だし、生物や恐怖の英語なんかきたらマズイ！

「専門外の質問はどうしましょう？」 あわてて聞くと、

「取り敢えず待ってもらって調べるんです。この時間は俺たちの勉強時間でもあるのです。」

古文・漢文のことだったら俺に聞きにきてくれていいですよ。B-1にいるんで。

俺も化学のこととか聞きにいくかもしれない。桜井先生が来てくれてよかった。」

満面の笑顔に暗い顔で「はぁ・・・」と返事をしておいた。

なんてこった。もう勉強なんてしたくないのに・・・

専門外のことももある程度勉強しなくちゃいけないらしい。ちえっ←

重い足取りで指定されたA-3の教室に着いた。一つ息をついてカチャリと入る。

「おはようございます。」朝一であるにも関わらず、自習室には既に4名ほど生徒が居た。

全員バラバラの席に座っており、驚いたように此方を見ている。

「今日からよろしく。桜井です。専門は化学だけど、なるべく質問には答えられるようにするから。」

幼い感じのする子達を交互に見ながらにこやかに挨拶した。

「桜井先生は化学の何クラスを教えるんですか？」

後ろの方の窓際に座っている堅気じゃない雰囲気男子生徒が話しかけてきた。

高校生ではなさそうだ。浪人生だろうか？

「えっと、高校生のEクラスです。」

この予備校は半端なく大きい。中学受験・高校受験・大学受験コースがあり、

それぞれの科目が成績によってクラス分けされており、特進コース・A・Eクラスと計6クラスずつある。

私の受持ちクラスをきいたその生徒はバカにしたように嗤った。

「E？大した事ないね。」

こういう奴は相手にするだけバカをみる。他の生徒たちは気まずそうに目を逸らし、勉強を再開している。

「他人を評価するより、自分を磨きなさい。どんなに頭が良くても、他人を貶めるのは卑しい人間のすることだよ」

男子生徒は目付きを険しくして盛大に舌打ちをしたかと思うと、乱暴な足取りで教室を出て行った。他の教室に行ったようである。

「はい、うるさくしてごめんね。続けて。」

男子生徒が出て行った扉を見ていた生徒たちはハツとしたように机に目を戻した。

それから時間と共に生徒は増えていき、大した質問もなく午前は終わった。

12時になったことを確認し、講師室に戻る。今日子と一緒にお昼をとる約束をしている。

「どうだった？大丈夫だった？」近くのカフェでランチを注文してから今日子が聞いてきた。

「ん、特に何も。難しい質問もなかったし。」

男子生徒のことなど話すと長くなりそうなので無難であったと伝えた。

「桜井先生、若いし美人だから質問攻めにあったんじゃない？」

いつも今日子と一緒にお昼をとっているという春日先生だ。清純カワイイ感じのこれまた若い政経の先生だ。

「いや、全然。春日先生は人気あるみたいですね。」ランチに出る際、ロビーで男子生徒にからかわれていた。今日子と同じくらいみたいだが、年下にさえ見える。

私は女友達を作るのが苦手だが、おっとりとした春日先生なら仲良くなれそうだ。

ランチから戻ったら13時10分前だった。13時からまた自習室

に行かなければならない。

まあこの間も生徒たちは勉強しているわけだが・・・。
あくまで「自習」なので好きなときに休憩したりご飯を食べに行ってもいいらしい。

13時になり、自習室に戻った。

生徒が午前中より少ない気がするのは、皆お昼に出ているのだろうか？

最初は気づかなかったが、暫くすると自習室には異質な音が聞こえた。

「？」立ち上がり音の方に近づくと、男子生徒が机に顔を伏せ、イヤホンから音楽が漏れている。

寝るのにメガネは邪魔そうである。驚かさないようにそっと少年の肩に手を置く。

パチリと音が出そうな勢いで、少年は目を開いた。

・・・黒目がちな大きな瞳である。

「音が漏れているから、小さくするか消しなさい。」

第一夜（後書き）

やっとメガネが出てきた。

第二夜

「音が漏れているから、小さくするか消しなさい。」自習中なので声を抑えて言った。

しかし少年は不愉快そうに目を眇めると予想外の返答をした。

「なんで？」

・・・げんなりだ。どうして当たり前すぎることに答えなくてはならないのか。

古今東西、勉強する場所では静かにしなければならない。

ここは活気を求められる小学生の学級ではないのだ。

強情な表情の少年に、咄嗟に厄介そうだと判断した私は

「ちょっと外に・・・」と言って少年を連れ出した。

廊下に出ると、教室の温度が少し上がっていたことに気づく。換気をした方が良さそうだ。

改めて少年を見ると、小柄だがすっきりと整った顔をしていることに気が付いた。

これと言った特徴は挙げられないが、強いて言えば一つ一つのパーツが秀逸でバランスがいい。

艶やかな黒髪はサラリと流れて、体型はスラリとしている。

通った鼻筋に薄い唇。大きな瞳は黒縁のメガネに遮られており、冷たい印象を与えている。

小柄だと思ったが、153cmの私よりはもちろん高い。しかし立ち上がると意外と首の角度が上がる。

小柄に見えるのは、顔が小さすぎるせいではなからうか？生意気である。

しかし美少年であろうとなかろうと、関係ない。

「皆静かに自習中なの。他の人の邪魔をしないで。」当たり前のことと言ったつもりだ。

「いつもあんなモンなんだけど、なんで今日はダメなの？」

「他の人の集中力が落ちるから。不満なら他の教室に行きなさい。」

「やだね。邪魔だと思う奴が出てればいい。家でやればいい。

それにこんなんでも集中力を掻く程度なら受験なんてうまくいかねえよ」

それは、そうだ。しかしここは負けられない。

「皆が皆、集中できる環境にあるわけじゃない。テレビとかの誘惑に負けないためとか、

小さい兄弟がいて中々集中できない人もいるかも知れないでしょ？

・・・君だけを優遇するわけにはいかない。」

少し声が大きかったかもしれない。言い合ってたところに春日先生が通りかかった。

「高松君？桜井先生、どうしたんですか？」慌てて駆け寄ってきた。

「いえ、何も・・・少し注意していただけです。」隠すつもりはなかったが大事にしたくなかった。

「先生に部屋から出て行けと言われたので・・・」しれっと少年が言った。

「桜井先生！どういうことですか！？」え！わたし！？」

「高松君、部屋に戻っていいです。桜井先生、ちょっと・・・」

高松という少年はクスッと嗤い、自習室に戻る前にチラ見してきやがった！

各階にある自販機のある休憩スペースに連れてこられた。

「春日先生、私イチャモンつけてたわけじゃないです。」

イヤホンから音が漏れてたから注意しただけで・・・！」

「彼は、いつもそうです。毎日来るわけじゃないですが、来ると音楽を聴いて寝てます。

彼は少し・・・特別で・・・」

少年は高松透、高校3年生の特進コース生らしい。彼はここで『勉強しない』。

この予備校の偏差値を上げ、模試でいい成績をとるために居る。サクラのようなものだ。

そのため、授業料免除、多少のことでは注意を受けない特別生徒。校長の知り合いの息子さんのようだ。

・・・ここにも居た。相手にしたくない厄介なヤツ。

「私は、生徒によって態度を変えるのはできません。・・・でも、わかりました。」

別にこの予備校に骨を埋めるつもりはない。無難に過ごしたかった。春日先生はホッとしたようである。

「はい。気を付けてください。」

自習室に戻ると一瞬目が合い、クツと笑いやがった。幸いもう音楽は聴いてないようである。

正直、見逃せないが関わりたくないのでホッとした。

15時になったので自習室をでて講師室に戻る。

17時からいよいよ授業である。17時まではその為の準備時間らしい。

私は今週は授業と一緒に受けて、来週からということになっている。

「桜井先生、お疲れ様です。自習監督はどうでした？何もなかったですか？」

いつの間にか戻っていた大宮が高いテンションで話しかけてきた。

「はい。ドキドキしてたんですが、皆結構大人しいんですね。」

同じくいつの間にか戻っていた春日先生をチラリと見ながら言った。

「マジですか！？俺なんて、皆ワザと難しい質問ばっかしてきて、困りました。」

愛されているのだろう。いかにもいじってくださいな大宮先生に生温い笑顔を向けて慰めた。

そんなこんなをしている内に授業の時間になり、大宮先生や春日先生は自分の教室に行った。

私も、今化学Eを受け持っている山田先生の席に向かった。

山田先生は化学Eだけでなく、物理B・Cも教えているらしいお忙しい方だ。

その負担を減らすために私が来たのだけど・・・。

山田先生は40歳前後だが若々しい。少しくたびれたスーツに恰幅のいい身体を押し込めて人好きのする笑顔を向けてきた。

「桜井先生、最初はちよっと戸惑うかもしれないけど、頑張ってね！化学Eよろしく！」

そして声が大きい。

教室へ行く間も、帰るときもずっと話をしていた。授業もパワフルだった。

私、大丈夫だろうか・・・？

化学は受ける生徒の人数の関係で、1日2コマ月水金である。私の勤務も月水金だ。

朝から働いているとはいえ、給料は大丈夫だろうか・・・←
他の数学や英語は毎日3コマあるらしい。結構大変そうだ。

やっと1日が終わり、簡単に日誌を書いてパソコンをシャットダウンした。

気が付けばもう20時半を回っている。

今日子はもう帰っている。事務の仕事は8時〜18時だそうだ。

「お疲れ様です。」隣で授業計画に頭を悩ませている大宮先生に一言挨拶して帰る。

春日先生は席を外しているようだ。

「あっ！桜井先生、今週の金曜予定ありますか？」大宮先生が慌てて聞いてきた。

「？」怪訝な顔をしていたのだろう。補足してきた。

「あの・・・桜井先生の歓迎会でもと思って・・・」

3コマ目がない人達でやろうって言ってたんです。」

「氣を使っていただいてありがとうございます。金曜は大丈夫です。」

ちょっと見栄を張ってしまった。金曜どころか全曜日予定はない。

ここに今日子以外の知り合いなどいないのだから。

しかし微妙なニュアンスは通じなかったかもしれない。

「よかった。じゃあ時間と場所、メールしておきます。」

パソコンと共に仕事用のメールアドレスが用意されていた・・・こういう時に使うのか。

「はい、お願いします。じゃあお疲れ様です。」「お疲れ様です。」

考えてみれば、前の会社では歓迎会を開かれる間もなく倒産してしまったな・・・

などと考えながら閑散としたロビーを通り過ぎようとしたとき、目の端に人が写った。

第二夜（後書き）

志乃は特別優秀ではないけど、何でもそつなくできる人間です。そしてドライだけど、差別区別を嫌います。

第三夜（前書き）

少し暴力表現が出てきます。ご注意ください。

第三夜

ロビーを通りかかった時、ゆっくりと近づいてきたのは3人の男子生徒。

その中の一人は朝に突っかかってきた堅気でない雰囲気男子生徒だった。

完全に嫌な予感がしたし、呆れた。

一人では行動できないのだろうか？小学生の女子じゃあるまいし！

「こんばんはあ、桜井センセ」ニヤニヤ晒っている。気持ち悪い。優位に立っていると疑わない余裕なのだろう。

「俺達ちよつと化学でわかんないトコあってえ、教えてくんないかな」って思ってる」

「時間外です。今度にしてください。」

冷静に分析できようが、怖い。相手は一人ではないし、何と言っても未成年だろうが二十歳過ぎだろうが大人の身体なのである。力では確実にかなわない。

一瞬講師室に戻ろうかと思ったが、エレベーターを待ってる間に捕まるのがオチだ。

駅前の一等地に立っているこの予備校前なら、この時間でもサラリーマンなど

歩いているだろうとふんで、足早にロビーを抜けようとした。

・・・が、逃がすつもりはなかったようで一人が前に廻りこみ、もう一人に腕を捕まれた。

チッ！ってかそんな敵視されるほど激しく怒った覚えはない。

日頃溜まった鬱憤でも晴らされるのだろうか。

「放しなさい。犯罪者になるつもり？」低い声音で言い放った。

「はっ！講師に勉強教えてもらって何が犯罪なんだよ！？こっちはいい！」

踏ん張ったが両側から腕を捕まれ、ズルズルと引き摺られた。

この時間、授業にも自習室にも割り当てられてない教室の方へ向かっている。

それに気付いた瞬間、心臓がありえない音を立て始め、手汗が止まらなくなった。

まさか初日からこんな目に合うなんて・・・どーなってんだ都会は！！？？

ここで初めてガムシヤラに暴れて抵抗した。

冗談じゃない！私の貞操、こんなところでどうにかなってたまるか！！

しかしやはり大人の力を持つガキ共はビクとしなかった。

「おい！大人しくしろ！」するわきゃない！馬鹿か！

「や！誰か！助けて！」とうとう誰も居ない暗い教室に連れ込まれてしまった。

シヤレじゃないが目の前が真っ暗になりそうだ。

ヒンヤリとした教室の床に押し倒され、もうダメだと目を瞑ったその時、

ガランガラン！

大音量で教室の隅の机や椅子が乱れ、3人の男子生徒はビクリとその方向を見遣った。

「・・・誰だ！」この犯行を目撃したのは誰なのだろう。

私もそちらに目を向けたが、視点が低く、よく見えない。

「お前・・・」3人の内の一人がうろたえたような声を出した。

？ 講師だろうか？

「うるさい。行け。」姿の见えない者が発した声は、低かったがまだ少年のものであった。

その声を皮切りに、3人の内2人は不満げにノロノロと立ち上がった。

しかし残りの一人、例の男子生徒はまだ私を押さえつけながら声の方を睨んでいる様だった。

「理解できないのか？」少年の声は今や氷点下となって降り注いだ。「・・・くそっ！」やっと拘束を解き、未練ありげに一瞬こちらを見遣り、

男子生徒は2人の後を追って出て行った。

助かった。

今頃になって体が痙攣みたいに震えてきた。

しかし身体は思うように動かず、現れた人の方向を見ながらも身体を起こせなかった。

助けてくれた人はこちらの様子を窺っていたようだが、暫くすると溜息をつきながらこちらへやってきた。助けてくれた人だと判っていても、再び身体が強張った。

こちらを覗き込んだ少年は・・・メガネを光らせた高松透だった。

第三夜（後書き）

謎深き少年高松！なぜ3人の男子生徒は逃げ帰ってしまったのでしょうか？

s i d e 透 第一〜三夜（前書き）

新しい講師志乃に高松少年は何を思うのか・・・

side 透 第一〜三夜

いつも通り、昼頃に予備校に出てきた。

ここは学校より煩くないし、静かで環境が整っているところがマシだった。

ただ寝ていればいい。偶に模試を受けて高い点数を取ってやれば何も言われない。

そんなの、朝飯前だった。

今日はいつもと少し周りの雰囲気違った。

寝ながら聞こえてくる会話からすると、新しい講師が来たらしい。男共の声から、若い女講師らしいことが判る。

・・・馬鹿らしい。政経の春日もそうだが、女講師が生徒を相手にするわけがない。

それに生徒に手を出す講師などおぞましいだけだ。

そんなに講師と生徒の「禁断」とやらの溺れたいのだろうか？

擬似恋愛に興味はない。講師共に騒ぐやつらも、俺に擦り寄ってくる女共もウザかった。

完全に寝ているわけではないが、周りをシャットアウトしていた時突然、肩を触られた。

・・・誰だ？本気でイラつとした。頭を起こすと、そこには見知らぬ女が立っていた。

「音が漏れているから、小さくするか消しなさい。」

女にしては少し低めの落ち着いた声音で言った。この俺に、命令を。ありえない事態にイラつきは少しの愉快さに変わり、からかってやろうと思った。

「なんで？」この女が新しい女講師であることはすぐわかった。

何よりこの女に向けられる男共の視線で。

廊下に出され、改めて観察した。

まず小さかった。俺も大きいほうではないが、見下ろせてしまう。長い髪は右耳の下で一つに結ばれ、ボリュームのあるシュシュで留められている。

そして気が強そうな大きな目は猫のようにアーモンド形で、俺を睨めつけている。

小さい鼻の下にはふっくらとした唇が鎮座していた。口紅を塗っているわけでもなさそうなのに

紅い。軟らかそうだと無意識に思った。ピンクの頬はきめ細かく、毛穴は見えない。

講師ということは高卒でもあるまい。最低でも大卒のはずだが、そうは見えなかった。

同級生どころか、年下と言われても違和感は感じなかった。

身体も、小さいだけでなく幼い感じがした。胸が小さい。同じ女講師の春日も若く見え、

美人で人気があるが、胸は大きい。今後人気を二分するであろう目の前の女講師は俺に集中力の大事さについて説いてきた。

こんな程度で集中力が落ちて勉強できないのなら、元々その程度だったのだ。

ギリギリの学力で大学に入っについていけると思っているのだろうか？

途中で脱落して辛い人生を歩むのが関の山である。

キャンキャンと喚いている女講師が面白く、どう言い負かしてやろうかと口を開いたら・・・

春日が駆け寄ってきた。・・・もう終わりか。つまんねえな。この

後春日に話を聞いて

俺を優遇しなくちゃならないと知ったらどういう反応を見せるだろう？ つまらなくなるか？

『納得いかない』顔をしている女講師を眺めながら、教室にもどった。桜井か・・・。

そんな大人しそうな名前は似合わない。下の名は何というのだろうか？

戻ったときの顔を見たくて、音楽を止め待っていたら暫くして女講師が戻ってきた。

一瞬目が合った。その顔は『気に入らない』と言っていた。冷静な顔して、その実感情豊かな表情が可笑しかった。

その後、女講師はいなくなり、授業の時間になったため移動した。ロビー横の自販機前のベンチに。ロビーから丁度死角になっており、誰にも見つかりにくい。

そこでまた意識を飛ばしていると、馬鹿っぽい声が聞こえてきた。

馬鹿な奴らがどっかの女に絡んでるらしい。聞こえてくるに、講師のようだ。

始末に終えない馬鹿共。ここを辞めさせられたいのだろうか？俺はどうでもいいが、

こんなところで一応試験を通過って初めて通えるのだ。

馬鹿共の面を拝んでやろうと少し身体を動かしたとき、周りの音が一瞬、消えた気がした。

「放しなさい。犯罪者になるつもり？」・・・あの女！女王様か！？小柄な女がデカイ男3人に囲まれ、冷静に命令した時、笑いがこみ上げた。

しかし馬鹿共が理解できるわけない。女を引き摺っていく。奴らの使う場所はワンパターンでいつも決まっている。

これまでも見たことはあるが助けたことはない。面倒だった。

奴らは俺に見られてることなど気付いてないだろう。どうしようもなく鈍い。

今回も別に止めるつもりはなかった。厄介ごとに巻き込まれたくなかったし、関係ない。

でもその時、耳に入ってしまった。

「や！誰か！助けて！」絶望が色濃い叫び。女王様を取り乱している。

思考より早く、身体が動いた。男共は女を組み敷いていた。

複数の人間の気を逸らし、冷静に戻るのは・・・音だ。

殊更大きな音で3人の神経を此方に向けさせた。

俺じゃなかったら3人は邪魔した者をボコっていただろう。だが、俺にはできない。

2人はすぐ退散した。しかし1人動かない。馬鹿すぎて理解できないのか？

更なる一言の威風で、そいつを退散させた。奴ら暫くは大人しくなるだろうか・・・？

・・・愚者には無理か。

奴等が去って暫くしたのに、女は動かない。まさか遅かったのだらうか？そんな筈はないが。

観察すると、女が放心してるのに気付いた。これ以上手を貸してやる義理はないが・・・。

面倒だが、手を貸してやろうと近寄った。

女は目に見えて怯えた。助けてやったのに、納得いかない。よく見ると、ガクガクと震えていた。

スカートは捲れあがっており、暗い教室の中に白い太腿が浮かび上がっていた。

知らず、のどを鳴らし、ゆっくりと声をかけた。

「おい。・・・大丈夫か？」 大丈夫な訳はない。しかし他に言葉が見つからなかった。

「高松くん・・・？」 震えた声で自分の名を紡ぐ彼女に、心が変な動きをしたのを無視した。

「・・・立てるか？」 手を差し伸べるが、その手を凝視した彼女はしかしその手を取らず、自ら立ち上がった。

「ありがとう。助けてくれて。」 見る間に声の震えを抑え、引きつりながらも笑顔を作った彼女に、さっきよりもっと心臓が軋んだ。

第四夜

「おい。・・・大丈夫か？」先程とは打って変わった声音で窺うように声をかけてきた。

んなわきやない。大丈夫であろうかは（反語）。

しかしどうして昼間に因縁のあった私を助けてくれたのだろうか？最近は何事なかれ主義で、近所の人の顔さえ知らない世の中だというのに・・・。

関係ないだろうか？

反応の鈍い私に、彼は再び問いかけてきた。

「・・・立てるか？」手を差し伸べながら。

「・・・・・・・・。」ついその手を凝視してしまった。その手を取れということだろうか？

お姫様でもあるまいし、自然に彼の手を取れるわけでもなく、苦笑いしながら震える膝にムチうって何とか立ち上がった。いつまでも少女よろしく震えているわけにはいかない。

社会人として毅然としていたのに、まさか生徒に襲われるなどと言う

みっともない事態に陥った状況をこれ以上晒したくなかった。

「ありがとう。助けてくれて。」

完璧ではないにしても、声の震えを抑え、裏返らなかった幸運に感謝した。

服の埃を落としながらスカートの裾を整える間に、感情を立て直した。

しかし、声や表情は何かなくても身体の震えは止まらない。・・・

もう、限界だ！

「あ……今日の授業は終わったの？早く帰らないとご両親が心配するよ。」

私も帰るから……」普段呂律の廻らない私にしては早口で捲くし立てた。

早く一人になりたかった。そうでないと泣けないではないか。

もう涙腺が決壊手前だ。もうどう思われてもいいからその場から逃げ出したかった。

「家、どこ？」

もっと文章で喋れないのだろうか？という疑問が頭をかすめつつ、突然家を訊ねられて困惑した。

引っ越してきて間もないし、住所は咄嗟に出てこない。

……ケータイにメモしてあるからいいのだ。

それに、どういうつもりだろうか？まさかコイツも助けた振りして私に一泡吹かせる気なのか？

そんなことされたら憤死できる自信がある。

「ななんで？」先程の勢いはキレイサッパリなくなり、どもってしまった。

「送る」気遣わしい雰囲気削ぎ落とし、無表情に言われた。

……やめてくれ。頼むから一人にしてくれ。助けてもらって悪いけど、今はアンタも恐いんだ。

「私は大丈夫。駅でタクシー拾うから。君ももう帰りなさい。」

精一杯の威厳を持たせたつもりだ。

しかし、アツサリと却下されてしまった。

「アンタ馬鹿か。奴等が待ち伏せしてたらどうする？心の準備して犯られるつもりか？」

不機嫌そうに眉が顰められている。

そう言われてしまうと……自信がなくなってしどろもどろになっ

てしまった。

黙ってしまった私の手首を掴み、彼は無言で歩き出した。どうすればいいのか判断がつかず、されるままに後を追う。4分ほど歩くと、駅前のタクシー乗り場に着いた。

ここには常時タクシーが何十台も客待ちをしている。

客足が落ち着く時間なのか客の列はなく、すぐに黒いタクシーに乗れた。

私をタクシーに押し込み、彼も躊躇なく乗り込んできた。

「どちらへ？」後車のために走り出しながら、運転手さんがお決まりの問いかけをしてきた。

「家、どこ？」彼がさっきと同じセリフをぶっきらぼうに発した。

慌てて、記憶の底から町名をひねり出し、アパート近くの橋名を出した。

タクシーの中では終始無言だった・・・とは言い難い。

運ちゃんは私達をカップルだと勘違いしているらしく、返答に困る質問をポツポツとされた。

彼に答えるつもりはないらしく、総ムシだったので、私が気を使つて無難に答えなければならなかった。なんでやねん！

しかし気付くと震えはかなり収まっていてホッとした。

アパート近くの橋に差し掛かり、ここでいいと言って停めてもらおうと、

私が慌てて鞆を漁っている間に彼は無言で諭吉さんを運ちゃんに渡して釣りは要らないとのたまった。どこのお坊ちゃんデスカ！？車内で問答は悪いと思ったので、出してからタクシー代を払おうと取り敢えず降りた。

「はい。」財布に奇跡的にあった諭吉さんに別れを告げて渡そうとした。

「いらね。アンタの家は？」はい、スルー。しかしそんな訳にはいかない。

生徒、しかも自分で稼いでない年下にお金を払わせるなど言語道断である。

「いらないじゃない！受け取ってもらわないと困るから。」無理やり彼の手に押し込めた。

彼は鼻で晒って「貧乏人のくせに。」と言いながらさほど抵抗も見せずに受け取った。

そんなこんなをしている内にタクシーは去っている。

私はハッとした。この子はどうやって帰るのだ？

「君、家はどこ？」慌てて聞いた。近くなのだろうか？

「助けてもらって茶も出さずに追い返すの？礼儀がなってないなあ。

」厭味ったらしく晒っている。

家に上げてやらないといけないのか・・・？しかも気付けば22時を廻っている。

早く帰さないとヤバイ……。顔が青褪めた。

取り敢えず家に上げてやってタクシーをまた呼ぼうと、憤然と歩き出した。

第四夜（後書き）

信用してるわけじゃないけど、コイツなら大丈夫か・・・と家にあ
げてしまう、楽天家な志乃さんでした。

第五夜

50M程で今や懐かしいアパートが見えてきた。

テリトリーに帰ってきた気がして息をつく。

気に入らないのは後ろの坊ちゃんをテリトリー内に入れなければならないことだ。

鍵を開ける前に、睨みながら釘を刺した。

「すぐにタクシー呼ぶから、すぐに帰ってね。」

ニヤリと口元を歪めながら彼は了承した。

「・・・きたねえ。」奴は巧妙に私の堪忍袋を突く。

断じて言う！汚いのではない、片付いていないだけだ！・・・と、心の中で叫びながら奴を無視してヤカンに火をかけた。

私はコーヒーが飲めないのでウチには紅茶しかない。

「紅茶しかないけど、いいよね？」

イラつきの所為で少し高圧的になってしまったことは否めない。

「は？コーヒーだろ。フツー。」生意気すぎてぶん殴ってしまいそうだ。

「じゃあ、何も飲まずに帰れ。」・・・とタクシーの番号を調べ始める。

「はああ、いいよ、紅茶で。早く。」フン、最初からそう言えはいのだ。紅茶の用意ならしてある。

お湯が沸くまでタクシー会社の番号を探し出し、電話した。

その間に奴は偉そうに私の自慢のソファにふんぞり返っている。

コールが切れ、聞き取りにくい話し方のおっちゃんが出た。

「タクシーを1台お願いします。出来るだけ早い方がいいのですが、何分後なら大丈夫ですか？」

住所を伝えたとおっちゃんには信じられない数字をはじき出した。聞き間違いかと思った。

「えっっ?? もう一度お願いします。…………1時間後!？」
後ろで奴が爆笑していた。

取り敢えず手配をお願いして、もっと近いタクシー会社はないかとタウンページをひっくり返した。

「無駄だね。さっきのが一番近いよ。」いつの間にか背後に回りこんだ少年が

面白そうにのたまった。私のこの辺の地理感が怪しいのを楯に騙しているのではないだろうか？

一瞬疑ったが、自信満々な彼の表情に、諦めた。

ヤカンがうるさく鳴き始めたので一旦紅茶を入れ、彼に向き直った。
「帰りが遅くなっちゃうから親に連絡して。必要なら私が出るから。」

男子高校生の門限事情など知らないが、連絡するに越したことはないだろう。

しかし拒否された。

「必要ない。」

湯気が濛々と立っている紅茶に口をつけつつ（よく飲めるな……）、表情を消した。

「えっ? でも……怒られないの?」

いいのだろうか? 予備校で勉強してるならまだしも、彼は私の家にいるのだ。

後で問題になったら困る。

「いつものことだし、どうせ顔も合わせないんだから、いつも帰ってるかどうかも知らないと思う」寂しそうにでもなく、当然のことのように淡々としている。

「そんな訳ないでしょ。どんなに静かにしてても音は聞こえるし、

靴だってあるんだから・・・。」他人の家庭事情に首を突っ込みた
くないが、困惑してしまう。

「そうだな・・・知ってるかもしれないけど、話しかけてこないん
だから、

居ようと居なかりょうとどっちでもいいんだろ。」薄ら嗤いで言う少
年が少し怖かった。

現代社会の歪みと捉え、それ以上は何も言わなかった。

第五夜（後書き）

彼・坊ちゃん・少年・奴・コイツ・・・志乃は感情で心の中での呼び方をコロコロ変えます。

第六夜（前書き）

一部不愉快な表現が出てきます。ご注意ください。

第六夜

「アンタ・・・意外と落ち着いてるな。」

ようやく私が紅茶に口を付けられるようになって啜っていた時、彼がボソツと言った。

それもそうだが少し困ってしまった。

私がこういう目に合うのは初めてではない。

傷つけようとして襲われたのは初めてだが・・・私は昔から痴漢によくあった。

10歳前後からショッピング中に店内で付け回されてお尻を触られたり、

酷いものでは背後から体液をかけられたこともある。

子供だった私はエイリアンの唾液が落ちてきたと焦ったが、今思い出すと吐きそうだ。

大学生になってからは、勘違いをした男子に突然抱きしめられたり、その後ストーカーされたり、妻子ある教授に迫られたりと波乱万丈であった。

その度に私は自己嫌悪に陥った。私が彼らに勘違いさせる行動をとってしまったのではないかと・・・。

しかし、どれもこれも友達に相談できるような内容ではないし、私は殻に閉じ籠った。

そんなことを繰り返すたびに、段々免疫がついてしまったのかもしれない（今思うと）。

回想に浸ってしまったが何と言おう・・・。

「・・・君のおかげかな。ちょっとムカついたけど、アリガトね。」
ここは助けてくれた少年を持ち上げておくことにした。

にこやかに言ったが、選択肢を誤ったらしい。

「アンタまた繰り返すよ。こんな簡単にオトコ家にあげるようじゃ・・・実は尻軽？」

お前が強引に上がってきたんじゃ！！再び堪忍袋が満タンになった。「かもねー。君こそ、簡単にオンナの家が上がったら喰われちゃうヨ。美少年。」

せせら嗤ってやった。バーカ、バーカ！誰がお前なんか襲うか！！チクショー、なんで初日から襲われたり見縊られなくちゃいけないんだ！年下のクセに！！

「へえ・・・じゃ、襲ってよ。オネエサン。・・・いや、センセイの方がいい？」

ギョッ！少年はいつの間にかカップをおいてにじり寄っていた。

しかしその目は獲物を嬲り殺す豹のようだ。コイツ・・・からかいおって（怒）。

本気じゃないと思っても、身体は条件反射的に小さく震えた。悔しい。

「でも私、ガキに興味はないんだ。やっぱ包容力のある大人のオトコじゃないと・・・っつ」

言ってる間にも奴は近づいてきて、今や鼻と鼻の距離は私の握り締めている

マグカップの直径ほどになった。しかもいつの間にか黒縁メガネは外されて瞳が顕になっている！

奴は静かに私のマグカップを取り上げ、私と奴の鼻先の間に障害物はなくなってしまった。

マズイ！・・・今降参すれば許してくれるだろうか？？

パニック気味の私ののは貼りついてしまっただけで声を発するどころか空気を通すことさえできない。

瞬きできない内に奴の大きな黒い瞳の中の私はデカくなり、ぶつかる寸前、

粘膜を守るためか反射的に視界をシャットダウンした。その瞬間、

くちびる・・・が・・・

圧迫感の後、ぬくもりを感じた。そして感覚は次のステージに移行した。

滑りだか湿りだかが唇を襲ってきたら、口内までその感覚は伝染した。

後ろに退こうにも首の後ろと後頭部に障害物があってムリみたいだ。

今まで何度も危ない目にあってきたが、身体の密着以上は許したことなかったのに・・・

とうとう初キスを奪われてしまった！！！！（子供のころの白雪姫ごっこはカウントしないことに決めている）
ショック過ぎる！

感情は涙を流すと言う行動で抗議を示し始めたが、感覚は別人格のようだった。

私より少し高目の体温が舌に絡んできた時・・・気持ち良かった。まるでとろけるみたい。

感情の主張はそのままに、感覚は後方への応力を弱めた。

暫くして（何秒かは体内時計の一時的故障により計測不可）拮抗能力がなくなった所為か

首の後ろと後頭部の障害物はゆっくりと前に移動してきて、私の左右の頬を包むと

ゆっくりと巻き戻しのように感覚が収束し、再び黒い鏡の中の私が出現した。

「ゴチソウサマは？」

目の前の悪魔はニヤリとしながら更なる要求をして私を卒倒させた。

第七夜

一瞬意識が遠のきかけたが、持ち直した。

冗談じゃない！ただかれてしまったのは私の方だ！！礼儀正しくゴチソウサマと言え！！！！

MAX音量で発したつもりだが、スピーカーがイカレてしまったのか、

無声映画の出演者のような演技をしてしまった。

アナログな私は少し叩けばすぐ直る。

「こここのませガキがあゝ！！さっきの奴等と一緒に学校に言ってやる！！」

さっさと出てけ！外でタクシーを待て！！！！」

怒り心頭のあまり、とても23歳とは思えないセリフを吐いてしまった。

男女の貞操観念が薄い私は（そもそも付き合ったことがないのだが）キスくらいでは絶望しない。

単に接触する部分が唇であるというだけで、特別視することはないと自分を納得させることが出来る。

問題は目の前のガキだ！5歳も下のクセに、私をからかう為だけに（もしくは脅しか？）

無理矢理キスしてきやがったのだ！老婆心ながら最近の若者の性生活が心配である。

一気にヤカン以上に湯気と騒音を上げ始めた私を見て、小僧は吹き出した。

「ぷっ……そんなんでいいの？ つくづく甘いな。婦女暴行で警察にでも届けばいいよ。」

「言っとくけど、奴等は未遂でもアンタは実行犯だよ！」

警察沙汰にするつもりはないが口の勢いは止まらない。

「でも……良かったでしょ？」 奴はゆっくりと立ち上がりながらメガネを装着した。

私は思わず身構えたが奴はそれ以上近づいてこなかった。

そのまま玄関に向かう。驚くことに本当に出て行く気らしい。

私は慌てた。未成年をこんな時間に外に出して、何かあったらマズイ。

下手したら女に間違われて襲われてしまうかもしれない。

しかし憎まれ口を叩く小僧にかける言葉がない。

「高松くん……！ まっ……。」

彼はノブに手をかけた状態でピタリと止まり、顔だけ振り返った。
な、なんだ！？

「桜井先生。名前は？」

名前！？ 今呼んだじゃないか。……下の方か。教える必要はない！
しかし教えないのも大人げない気がして小さい声で発した。

「………志乃」

今度は身体ごと振り返り、目を細めて勝ち誇ったような顔をし、言い放った。

「志乃がして欲しいなら、またしてやる。」

あまりの傲慢さに、目の前が今度こそ真っ暗になった。

「二度と！ 一生無い！」 怒鳴り声を背に受けながら笑い声を上げて今度こそ奴は出て行った。

それまで、少年ながらも邪悪な嗤いにしか見えなかったが、その時初めて歳相応の笑顔だった気がする。

脱力したが、慌ててベランダに回り、カーテンの隙間からそっと外

を覗き見た。

ちょうどその時、タクシーが敷地に入ってきた。先程のタクシー会社のようなのだ。

あれから1時間も経っているわけ無いが、配車できたようだ。

・・・運のいい奴。奴が乗り込んでいるのを見ながら、

苦々しい想いで、しかし少し安心しながらカーテンを閉じた。

ドツと疲れが襲ってきて座り込んだ。

その時、奴が座っていたあたりになにか落ちていた。

「？」拾ってみると、普通部屋に落ちているはずのない諭吉さんだった。

「・・・！？」諭吉さんは半分にゆるく折れている。

タクシーでさっき見た奴の財布は長財布。

私のは学生時代に買った2つ折。

「・・・何なのアイツ。」

私の予備校講師生活は、これ以上無いくらいお腹いっぱいな幕開けを果たした。

第七夜（後書き）

出会いからお腹いっぱいな2人です。

基本的にはお子ちゃまな2人にしては、頑張った展開といえましょう。

・・・え？ R15ギリギリですと？ まさかまさか（笑）

ホントの大人な世界と言うのはこんなものじゃないでしょう？

side 透 第四～五夜

明らかに虚勢を張っている。

自分と線を引き、あくまで講師の面を手放さない女に苛立った。

しかも・・・親が心配しているときた。幸せに育ったらしい女に苛立ちは増したが、

平気な顔をして今にも零れ落ちそうな目を瞬かないようにしている女を、何故か放したくなかった。

まともに回ってない頭で動こうとする女を口車に乗せ、黙らせたら簡単についてきた。

（馬鹿だなコイツ・・・）思わず笑いそうになったが、堪える。不信心を持たれたら困る。

さほど大きくない己の手で一周してしまった手首が、力を込めさせた。

こうして触れると、まだ震えているのが判る。内心舌打ちをしながら歩き続けた。

首尾よくタクシーに乗せ、自分も乗り込んだ。

彼女はチラリと不満そうな顔をしたが、何も言わせるつもりは無い。道中、下世話なタクシー運転手が意味ありげに此方を見てきたが黙殺した。

コイツ・・・二度とこの界限で働けないようにしてやる。名前は覚えてぞ。

最後の客として、チップをはずんでやった。

降りたところは低層住宅の立ち並ぶ、古めかしい住宅街だった。

・・・こんな所の部屋を選ぶのはコスト重視である証拠だ。貧乏なのだな・・・と少し不憫になった。

その貧乏人がこの俺にタクシー代を出してきた。そんなもの受け取

るわけないだろう。

そんなことより、家はどれだ？どうやらタクシー代を受け取らなければ話が進みそうになかったので、好きにさせた。部屋に置いてくればいいか。

やっと家に向かえると思ったら今度は俺の帰りの心配をしてやがる。どうとでもなるから早く家に案内しろ！

少し歩いたところにある2階建てのアパートマンにの外側にある階段を登り始めた。

あまりのボロさに呆然としてしていると、生意気にもすぐに帰れと釘を刺してきた。

こんなところ、1時間だって居れるものか！

この女に・・・そう、もう少しだけ触れたら今日の所は放してやる。この時、俺は決めた。

部屋の中は・・・雑然としていた。こんな小さな部屋でさえ片付けられないのか！？

驚くべきことだ。他人には厳しいようだが、自分には甘いのかもしれない。

「紅茶しかないけど、いいよね？」

しかも客に出すべき飲み物さえ揃ってない。・・・いや、そもそもココは他人を招くような場所じゃないのか。

仕方ない、妥協してやろう。この俺が妥協するなんて滅多にないことなんだぞ！

彼女は早速タクシーを手配しはじめたが、この界限にタクシー会社はない。

偶然近くにいるタクシーはいるかもしれないが、その内の一つは確実にもう客を乗せることはない。

さっきタクシーを降りて即座にあのタクシー会社に電話しておいた。

案の定、ここに配車されるのが1時間後と聞いた彼女は絶句していた。思い通り過ぎて笑える。

必死で近くにタクシー会社がないか探す彼女の背後に近づいた。

分厚い電話帳を彼女の後ろから覗き込むと、彼女の首筋から甘い・
・ゾクリとするほど温かい匂いがした。

首筋に鼻を埋めて肺いっぱいこの薫りを詰め込みたい衝動に駆られた。

だが、堪える。まだそこまで行く気はないのだ。

話しかけると、予想外の近さに彼女は鼻白んでいたが、瞬時に真顔に戻った。

しかし彼女が振り返ったときにすぐ近くで見たふっくらした、紅い唇は、俺の視線を放さなかった。

その紅さがいつまでも目の前でチラつく。

知らぬ間に、また親の話になっていた。遅くなるから連絡しろと？
そんなことしてみろ。却って迷惑そうにする顔が目に見え、
浮かんで嗤える。

素っ気無く切り返すと、追求しては来なかった。

s i d e 透 第四く五夜（後書き）

早速罫を仕掛け始めましたか。高松少年はちよっぴり我尽で意外と子供っぽいです。

s i d e 透 第六夜（前書き）

少し生々しい表現が出てきます。ご注意ください。

side 透 第六夜

「アンタ・・・意外と落ち着いてるな。」

どうやって追い詰めるか、近年稀に見る楽しさで計画を組み立て始めた。

彼女は一瞬遠い目をしたが、数秒後にはうそ臭い笑顔でお世辞を言ってきた。

その笑顔と世辞を聞いた瞬間、計画は成った。

目的ついでにその面、剥がしてぶっ壊してやるよ。

彼女は簡単に挑発にのってきた。回答予想までキツチリヒットだ。

「へえ・・・じゃ、襲ってよ。オネエサン。・・・いや、センセイの方がいい？」

センセイの方が背徳感があるかな・・・昼間の周りの奴等を揶揄って、愉快的気分が増す。

こんなシチュエーション今まで嗤ってたのに、いざやってみると愉しくて堪らない。クセになりそうだ。

メガネを外し、音を立てないようにテーブルに置いて近づく。

「でも私、ガキに興味はないんだ。やっぱ包容力のある大人のオトコじゃないと・・・」

・・・その一言は余計だ。台本を勝手に変えないで欲しい。

一気に不愉快になって、スピードを速めた。

彼女の身震いを目端に収め、目が覚めない内にそっとマグカップを取り上げる。

途中で落として割れたりしたら興醒めだ。

彼女はまるで誘うように、紅い口唇をうっすらと開いた。もうその距離は1桁cm。

直前まで狙いを違わぬように見つめた。

・・・4・3・2・1・・・

やっと触れた。

触れられれば、今日の所はいいと思っていた。でも触れた瞬間、欲が出た。

・・・もっと欲しい。もっと、奥まで・・・。

唇を舐めると、自身の唇よりその軟らかさを味わえた。

うっすらと開いている隙間から自身を滑り込ませると、さっき飲んだあまり薫りのしない紅茶の風味をほんのり感じた。

同じ物を飲んだせいかな、溶け合うみたいに同じ温度、同じ味になっていくのを感じる。

子供の頃『キスは甘い味がする☆』と言っている奴がいて、頭がおかしいんじゃないかと遠巻きに心配したが、あながち間違いではない気がする。

どうしてこんなに甘い気がするのだろう・・・。

夢中で貪っていたらしい。気付くと、彼女は猛然と涙を流していた。・・・悔しい。気持ちいいのは俺だけなのか。

いつの間にか逃がさないように掴んでいた彼女の頭を解放しようとしたとき、手にかかる力が段々弱まっていった。

放しがたく、未練たらしく啄ばんでいたら、「ん・・・」と彼女から微かに甘い音が響いた。

その音と共に貪っていたものが微かに向こうの意思で擦り合わせてきた気がした。

どうしようもなく興奮したが、これ以上シタら止まらなくなる確実な予知ができた。

最後に一度強く吸ってから、彼女の止まらない涙を掌にもらい受け、漸く放した。

s i d e 透 第六夜（後書き）

高松少年の視点だと生々エロティックになってしまいます。R指定に引っかけられないか心配です。

side 透 第七夜

手放した瞬間から総ての器官が不満を叫び始めたが、講師の仮面をかなぐり捨てた彼女によって逆に平生に引き戻された。

初めは寺の鯉のように口をパクパクさせていたが、途中で声帯が震えてないのに気付いたらしい。

『先生に言いつけてやる！』的なお子様発言の後、出てけとまで言われた。

元々長居するつもりはなかったし、これ以上コイツを眺めてたら行くところまで行けそうな気がした。

別にそれでもよかったが、流石に塵溜めでヤルのは気が引ける。気が変わらない内に退散しよう。

まだキャンキャン座敷犬みたいに吠えてる彼女の横をすり抜け、ノスタルジックなドアノブに手をかけた時、また聞こえた。

「高松くん・・・！」この女に名前を呼ばれると・・・内蔵が歪む。

「桜井先生。名前は？」この女もそうなるのだろうか・・・？

『はあ？』って言いたそうな変顔を披露したあと、ゴニョゴニョと微かに聞こえる声を出した。

「・・・・・・志乃」

なんて似合わない名前だ！桜井志乃。古風な美しい名前。名は体を顕さなかったらしい。

意外性の女王様にこみ上げた笑いはとうとう両手からこぼれてしまった。

「志乃がして欲しいなら、またしてやる。」

コイツは俺のものになる。

ギャフンという顔をした女に確信した。

ちよつとガードが弱そうなところが気になるが、さっきの反応からはそう経験ないことが窺われた。

演技なのだとしたら大したものだが、別にどちらでもよかった。

”年上のオンナ”とやらも悪くないだろう。

今までヘドロみたいに纏わりついてきたオンナ共には全く動かなかった食指はあの女を指した（ひとりでに）。

神経が通ってないのかと思っていたが、違っただけ。

興味がないではなかったが、周りのオンナ共はおぞましすぎて視界に入れる気にもならなかった。

だがあの小柄な女王様なら、きっと己を満足させてくれる。

もしかして自分はMだったのだろうかの疑問を感じながら、階段を降りた。

（しかしさっきは主導権をにぎって愉しかったが・・・。）

外の空気は高揚した気分を沈静化させるには充分だった。

丁度のタイミングでタクシーが着いた。

乗り込む直前、2階の彼女の部屋から明かりが漏れているのに気付いた。一応心配したらしい。

内心苦笑したが運転手に行き先を告げた瞬間、自分の表情と心の温度が消え去ったことを自覚した。

一体あと何年アソコに縛られなければならないのだろうか・・・。

高校卒業、大学卒業・・・その先まで？

冷たくなった指先は無意識に唇を弄び、先程までの感触を再現しようとしていた。

s i d e 透 第七夜（後書き）

やっと二人の長い一日が終わりました。
次は歓迎会で何かあるかも！？

第八夜

水曜は、また奴等に会うかもしれないと内心冷や冷やしていた。奴等とは勿論、高松と堅気じゃない少年とその仲間達である。堅気じゃない少年では長いので、それとなく大宮先生に聞いた。特徴を言ったらすぐわかったようだ。

かりやさとし

刈谷智。20歳。教科平均Bクラス。某有名私立大学医学部志望。浪人3年目・・・どんだけ金かかるんだヨ。汗)

イヤイヤ、医学部浪人は多いようだ。仕方ないのだろう。

・・・しかし本当に医者になって人を救いたいのだろうか？この前はともそうは見えなかった。

親が医者なのか？よくありそうな話だ。・・・でもそこまで聞いたらおかしいかな？

「刈谷君がどうしました？」大宮先生が不思議そうに訊ねてくる。

「少し・・・質問を受けたので。」微笑んで終わらせた。

「え」えゝゝゝ！？マジですか？彼、俺には一っっ回も質問なんてしてきたことありませんよ。

下っ端に用はないって感じで・・・俺って一体・・・」

終わらせたつもりだったが大宮先生がサメザメし始めたので、慰めるのに苦労した。

あゝマジ厄介☆

しかし幸運にも高松にも刈谷にも会わなかった。

月曜のこと、予備校には言ったほうがいいのだろうか・・・。

何だか逆恨みされそうで怖いし、高松のことは・・・言うのが躊躇われた。

特別な生徒みたいだし、未遂で終わらなかったし、のこのこと家に

上げた私も悪いと言えば悪いし・・・。

刈谷達のことは今度今日に相談してみようと思った。

+++++

金曜。

3日目ともなれば感じを掴み、2コマ目が終わってもそう疲労感は無かった。

「桜井先生、お疲れ様！一緒にお店に行きましょう。」

春日先生はマリンカラーのニットに紺のプリーツスカートを揺らしながら嬉しそうに誘ってくれた。

「えっ！？皆で一緒に行きましょうよ！」大宮先生がアワアワしながら追ってくる。

今日の大宮先生は珍しく今風の若者らしい格好をしている。飲み会のためのオメカシだろうか？

今日の飲み会では12人くらい集まってくれたそうだ。

本当は講師は非常勤も含め大学受験クラスだけでこの3倍いるらしい。多いなあ・・・。

飲み屋は都会らしいオシャレな感じの洋風居酒屋だった。

私の大学のあたりにあった居酒屋では、お目にかかったことがないメニューが並んでいて、

よく分からない。バーニヤカウダってバカうまっつ！！☆

私はあまりアルコールに強くないが、甘いお酒は好きである。

3杯目のキウイサワーを飲んでいたところ、オーバー30の檜山先生と目が合った。

「桜井先生、お疲れ様です。まだ1週間ですがどうですか？」

檜山先生は少し苦手なタイプ・・・。皮肉な薄ら笑いをいつも口元に湛え、生徒の評判もいまいちらしい。

講師という職業の人々は、大宮先生然り、春日先生然り、山田先生然り・・・

皆明るくつつきやすい人が多いのだが・・・檜山先生はどちらかと言うと、

質問するのも勇気が要る感じだ。生徒達は大丈夫なのだろうか？

生物の特進・Aコースを担当しており、いつもせかせかしている。

今日はなぜ来れたの！？って感じで、私としては別に無理して仲良くなる必要のない人だ。

「はい。皆さんとても良くして下さいまし、生徒も皆言い子達で・・・」

私の口は大変出来の良い作り話製造機である。自分の演技に舌を巻きすぎて絡まりそうだ。

「それは良かった。桜井先生はお綺麗ですしすぐに人気が出るでしょうね。講師は人気商売ですから・・・羨ましいことです。」

・・・まさかそのお世辞に喜ぶとも思っているのだろうか？

檜山は嫌らしい晒いを浮かべながらねっとりとした視線を絡めてきた。

うげえ～～～気持ち悪い←誰か助けてえ・・・汗

さっき檜山が近づいてきたと思ったら今日子が遠のいていった理由を察した。裏切り者め・・・怒

檜山のネットネットした口撃に、地味にヒットポイントを削られていたところに、外人が現れた。

「学生の成績が上がれば、人気なんてどうでもいいんじゃないか？」

「マティス先生・・・」カツゼツのよろしくない私にはかんでしまいような名前だが、彼はフランス人ハーフらしい。

背は尋常じゃないくらい高いし（190cmオーバーらしい・・・初めて見た）、暗めの金髪で、

日本人が好む彫りの深い欧米顔は彫刻みたいに綺麗だ。（目の色はグレーだかブルーだか判らなかった。）

女子学生人気No. 1も当然の結果だろう。うん。日本人には判りにくいが歳は29歳らしい。

しかし！彼は決して笑わない。ブリザードビューティーでも有名だ。しかも大変厳しいらしい。

私の最大の敵、英語の特進・Aコース担当・・・万が一私が生徒だったら軽蔑されること請け合いだ。

彼こそ引き抜きが後をたたない超・人気カリスマ講師らしく、いつも毎日超☆忙しい！

（ちなみにこれらの情報源は大宮である。彼の憧れ・目標らしい。彼にとっては遠すぎる星だろう。）

顔に似合わず完璧な日本語で冷風を吹きつけた彼は更に続けた。

「主役を長い時間拘束するのは感心しないな。私も彼女と話しても・・・？」

ブリザードマティスはゴッドマティスに変身した。なんと私を助けてくれるようだ。

自分のことを「私」って・・・貴族！？

ゴッドマティスは言いにくいから今日からサーマティスと呼ぶことに決めた（心の中で）。

第八夜（後書き）

大人の付き合いは大変です。

典型的日本人な志乃は心で暴言を吐いても穏やかに接します。

第九夜

白馬の王子様よろしく、私を連れ去ってくれたサーマティスは・・・
愛想笑いもしやがらねえ!!

「あ・・・ありがとうございます。何とっていいか分からなかったの。」

何も言わないので、こちらから話さなければならぬかと気を使っ
てしまった。

「彼は人を貶めることだけには長けている。気を付けるように。」
諭されました。この長閑な予備校でどのような惨劇があったとい
うのだろうか・・・ゾッ。

「何故こんな中途半端な時期に？」おお、意外と世間話好きなのか？
「実は・・・恥ずかしながら入社した会社がいきなり倒産してしま
いまして・・・汗」。

従姉に相談してたら丁度こちらが人手不足ということで・・・。」

「従姉？」

「はい。事務の桜井今日子です。」

「ああ事務の・・・。渡りに船だったな。」

「まさに！です。・・・マティス先生はずっと日本で過ごされてる
んですか？」

「いや、小さい頃はフランスに。あとアメリカの大学に行ったが・
・？」

「すみません。日本語がお上手なので、ちょっと気になってしまっ
て。」

「ああ・・・日本は外国語教育が遅れているからな。根本的に教育
法を変えねばならないだろう。」

意外や意外！サーマティスは笑わないなりに話のテンションが合う

のか、気まずい雰囲気にはならなかった。

「ですよ。きっと私もその教育法の犠牲者です。でなければもっと気軽に海外旅行行けるのになあ……。」肩を竦めた。

私は旅行好きである。趣味は？と聞かれればまずこれを言うことにしている。

ホントは読書が一番なのだが、暗いと思われるかもしれないし、お勧めなど聞かれても困ってしまう。

「英語が苦手なのか？君は科学だったか。論文もあるだろう。」

「化学です（ココ、重要です！）。論文は専門語が多いですが文章自体は簡単なので、

読むのは平気です。卒論は日本語だけだったので、何とかなっちゃいました（笑）。」

聞き上手なのか、サーマティスとの会話は途切れない。

気だるげに傾げられた頭の角度が、少し細められた目元が、色っぽいですよ！ニイサン！

ワーキヤー騒ぐ女子達の気持ちが分かります。

「あ、また信者を作ってるな。桜井先生、Mr. マティスと仲良くなると、女子生徒からの風当たりがよくなりますよ。」

「校長先生！来てくださったんですか！？ありがとうございます。」驚いた。ダンディー校長のお出ましである。

「いやいや、当然ですよ。遅れてすみませんね。来週から授業を始めるんでしたね？

よろしく願いますよ。」

白い歯をキラーンとさせる勢いで笑いかけてくる。

「校長……。信者とはどういうことです？校長がそんなだから学校の風紀が乱れるのでは？」

無表情だったサーマティスが剣呑な表情になっている。

「おっと、マズイマズイ。怒られちゃった☆」校長は既に酔っているようだった。

うわゝゝ、どう収束させればいいの？

「えゝゝ、そろそろ時間ですので、今日はこの辺で。桜井先生から最後に一言いただいていいですかあ？」

赤ら顔になった大宮先生が場を仕切った。

突然スピーチを求められ、頭が真っ白になったが何とかしどろもどろ取り繕って、

長くも短くもない無難な内容にまとめた。

「志乃ちゃん、私この後二次会行くけどどうする？」

今日子はどうやら講師の一人とお付き合いしているらしい。

前にそんな話をしていたが、その人と一緒にこの後も飲みにくらしい。

「私は今日はこの辺で失礼するよ。楽しんできてね。」実はそんなに酒癖の良くない私。

今日は流石にセーブしたが、このまま飲み続けたら化けの皮が剥がれる危険性が・・・！

「あ、桜井先生、家どの辺ですか？送りますよ。」

ドキ。大宮先生が知るはずはないが、月曜の状況を思い出して重ねてしまった。

「大丈夫です。すぐタクシー拾って帰りますので。」

こう頻繁にタクシーを使つては破産してしまう。勿論電車で帰るが、気を使わせないためウソを言った。

一部の人間を除いて二次会に行くようだ。仲がいいんだな。

店の前で解散し、タクシー乗り場兼駅に向かって歩き始めたら、少し前にサーマティスが歩いていていた。

「マティス先生も電車ですか？」小走りで駆け寄って、話しかけた。

「いや、私もタクシーで帰る。」

話しながら歩く内に駅前のロータリーに着く。

「じゃ、私はここで・・・。」

「君もタクシーだろう？」

「いえ、やっぱり節約のために電車で帰ろうかと・・・。まだ給料入ってませんし。」

恥ずかしい話だが今日の財布には野口さんが数人いる程度だ。

「そうか・・・。」サーマティスはおもむろにケータイを出した。

サーマティスらしい、硬質な感じのする黒いスマートフォン（最新機種！）だ。

「番号を・・・。何かあったら連絡するように。」当然のようにケータイを差し出してくる。

普段使わない赤外線通信機能を苦心して呼び出し、番号&アドレス交換をした。

「授業のことでも、判らないことがあれば聞いてくれ。遠慮はいらない。」

サーマティス！こんなに簡単に番号交換したらストーカーが現れますよ！・・・と心の中で警戒を呼びかけた。

「では気をつけて帰るように。」

最後まで無表情で紳士で、少し優しいサーマティスのファンになり、波乱万丈の幕開けな一週間を終えた。

第十夜

・・・この子達は本当に受験で化学を使うつもりがあるのだろうか
????

突然の失業↓予備校入学(?)から2ヶ月。梅雨に入り外のジメジメとはまるで無関係のような教室内で授業をしていて疑問が湧いてくる。・・・いや、今に始まったことではない。実は授業を始めてすぐに思っていた。しかし新学期が始まったばかりということもあり、気にしていなかったのだ。

6月も中旬を迎えて、多くの高校で実力テストが行われたらしい。その化学の点数を順に聞いていき、私は絶望感に見舞われた。

赤点ストレ、あるいは平均を大きく下回っているのに対し、30人ばかりいる生徒たちはお気楽なものだった。

「なんでそこまで楽観的でいられるのか、教えて欲しいもんだよ全
く・・・←」

当初かぶっていた猫の皮はものの見事に外れてしまい、私のトラたる本性は生徒ばかりか講師達にまで知れ渡り、生徒達には『志乃姉さん』と呼ばれ、講師達にはすっかりいじられキャラと化してしまった。

「俺のトコも似たようなもんですよ。『こんな中国語読めるかー!』
ってキレられますもん←。俺も桜井先生みたいにコワキャラでいこ
うかな・・・。」

・・・ムリだと思う。ってか私だってコワキャラなのに何故かイジ
られちゃうし。

もっと威厳を持って接せねば!

その日の授業が終わってから次の授業の計画を練り始める。どうすれば化学の点数が上がるのだろうか？化学を好きになってもらえれば簡単かもしれないが、ここは予備校。小学校よろしく化学の実験をして気を引くことは出来ないのがツライところだ。

一度特進クラスの化学を見に行ったが、レベルも雰囲気も半端ない。私でも解けるか怪しい問題を、黙々と時計の針の音を掻き消す勢いでペンを鳴らしている生徒達に恐れをなしてしまった。

コ、コワイ……。

とても真似できない。問題集に入ると途端に質問の嵐になる我がクラスには難しいだろう。

……サーマティスに相談してみようかな……。そんなことが頭をかすめ、チラリと時計を見る。

もう3コマ終了のブザーが鳴ってから30分は経つ。しかしサーマティスは授業から戻ってくる気配はない。

人気NO.1講師には、授業後も勉強熱心な生徒達の質問が30以上降り注ぐ。

……また今度でいいか。

サーマティスは歓迎会の時の言葉を覆すことなく、よく話を聞いてくれる。顔に似合わず優しいのだ。

そんなこんなで授業や生徒の愚痴は大宮先生、授業の相談は山田先生やサーマティス、予備校の愚痴や女子バナを今日と春日先生に使い分けている。

今日はすでに講師室に戻ってきている春日先生でも誘って一杯ひっかけるか……。等とオヤジな考えをした時、サーマティスが漸く戻ってきた。

「桜井先生、今日はもう帰るのか？」ちょうど鞆を持った私と目が合い、問いかけてきた。

「はい。いつも遅くまでお疲れ様です。」そう言って春日先生の席に向かおうとしたが、サーマティスに引き止められた。

「一緒に夕飯でもどうだ？」ナント！誘われてしまいましたよ！？
こんな皆のいる前で・・・！」

「は・・・あ、あの、春日先生も一緒にいいですか？」失礼かもしれないが勝手に春日先生を道連れにしてしまった。春日先生も驚いている。

「もちろんだ。何を食べたいか相談して待っていてくれ。」サーマティスは踵を返し、自分の席へと向かった。

「春日先生も一緒に行ってくれるよね！？」急いで春日先生の隣に行って小声で哀願した。

「私は構わないけれど・・・いいの？マティス先生2人で行きたかったんじゃないかな？」

からかうような笑いで横目を向けてくる。

サーマティスのことは好きだ。超美形だし無表情だけど意外と話してて楽しいしよく相談に乗ってくれるし・・・。

でも友人としてなら気楽に男性と話したり接することができるが、自分のことを『女』として見ているかもしれない人には途端に身構えてしまう。自意識過剰でも何でも構わない。そういうことが苦手なのだ。

サーマティスには何度か「アレ？」と思うことがあったが、外人によくあるレディファースト的なものかもしれないと、疑問を退けてきた。だが2人でご飯を食べに行くなんて緊張してしまうのではないか！

単なる同僚として誘われたならいいが、今までかつてサーマティスが同性だろうと誘っているところを見たことはなかった。

「緊張しちゃうし・・・。お願い。」2人きりでなければ大丈夫だ。

小癪な小技のおかげか変な雰囲気になることもなく、楽しく春日先生リクエストのメキシコ料理を味わった。春日先生のズッコケ話に

冷静にツツコミを入れるサーマティスが妙に可笑しかった。

第十夜（後書き）

次こそメガネを登場させるゾ！

第十一夜

スパイシーな薫りのするメキシコ料理屋を出ると、梅雨らしい小雨が降り出していた。

私に折り畳み傘を持ち歩くクセはない。

「私が引き留めたのだし、タクシーで2人を送ろう。」とサーマテイスはこれまた紳士なことを提案してくれた。

「いえ、私カサ持ってますし、電車で大丈夫です。桜井先生、駅まで一緒に行きますか？」

春日先生が相合傘を申し出てくれた。面目ない。

「お願いします。マティス先生、今日はゴチソウサマでした。」サーマティスは当然のように3人分支払ってしまった。普通なら恐縮してしまうところだが、余りに自然で優雅な様に、春日先生と甘えさせていただいた。

「では気をつけて。・・・また誘ってもいいか？」

それは、私だけに向けられた言葉だった。慣れない男女のやり取りに、ドキドキ☆してしまった。

「あ、はい。今度はご馳走させてください。」店からの逆光で顔の赤さがバレないように祈る。

サーマティスは無表情を弛め、通りのタクシーを停めてスルリと乗り込んだ。

「スゴイ！マティス先生本気だよ！」

タクシーを呆然と見送ると、春日先生が興奮気味に肩を揺らしてき

た。

「うーん、そうかな？でもマティス先生人気あるしなあ・・・。」苦笑いで返すと、歩き出しながら更に畳み掛けられた。

「今日子さんて結構裏情報に詳しいじゃない？生徒に手を出したり

する講師のことウワサしてたけど、マティス先生はどんなに女子に迫られても全く相手にしないそうだよ？・・・それで逆恨みされてホモだって噂流されたりしたみたいだけど。」サーマティスがゲイだったら、その世界の人はさぞかし大喜びだろう。

「ちよつと苦手なんだ。そういうの。・・・でもマティス先生ならいいかも。」

話しながらゆっくり歩いていたが、すぐに駅に着いた。

「桜井先生羨ましい。私もときめきたいなあ。・・・じゃあ、私こっちだから。カサ、買いなよ？」

乙女話を切り上げて春日先生と別れた。

もう23時を過ぎているが、さすが都会！まだ電車がある。しかし平日のこの時間では既に人も疎らだった。

方向を変えていつものホームに行こうとして、前方にいる人物に足を止めた。

「・・・こんな時間に何をしているの？」思わず鞆を握り締めた。

「桜井センセイこそ、こんな時間までデート？」薄く笑いながら近づいてくる。

黒縁メガネで、表情がよく分からないのが少し怖い。

「早く帰りなさい。」無視して横を通り過ぎようとした。

「定期なくしちゃって・・・大事なモンが入ってたから探してたんだ。」再び、足を止めた。

・・・仕方ない。不本意だが困っている生徒を見過ごせなかった。

「どんな定期入れ？」聞くと彼はおかしそうに晒った。「手伝ってくれんの？優しいね。黒いヤツ。」

もつとちゃんとした特長を言え！と言いつうになったが、定期入れなどもともとそんなに個性が出せるアイテムではないか、と考え直し他のアプローチを試みた。

「何が入ってるの？」

「それは秘密。見つけてくれたら見せてあげるよ。」ニヤリとした顔に、見せてもらわないことを心に決めた。

「じゃあ、歩いた所を教えて。でも一通り探して見つからなかったら、もう遅いし今日は帰りなさい。」

仕方ない。終電までまだあるし、少しでも付き合ってやるか。

この仏心を、私は今後一生後悔することになる。

第十二夜

高松少年の歩いた跡を辿ったら、当然予備校に逆戻りした。この時間、既に表門は警備員の帰宅と共に施錠されている。

しかし、当然一般には知られていない裏口は、講師のもっているカードキーで解錠できた。

テスト時期や受験シーズンには重宝するらしい。

裏口から校内に入ると、暗く静まり返ったビルには第六感を刺激する気配があった。

ギョエエ〜！コワイ！！独りじゃなくてよかった・・・。

「で、今日はどこで寝てたの？」

明かりをつけ、ロビーを簡単に見回った後、次に捜す場所を求めて聞いた。

「ん〜今日は・・・そういえば久しぶりに校長と話したな。最近調子はどうだって・・・ウザイよね。」

校長室か・・・初日以来行ったことがないけど、入れたっけ？

（勝手に入って・・・怒られるかな？）一応トライしてみようと、校長室の前まで来て、恐る恐るノブをひねる。

カチャリ

静かな廊下に金属音を響かせてドアが開いた。

一歩踏み出すと、絨毯の思わぬ弾力に一瞬足をとられそうになった。

「っと、大丈夫？」高松少年に腰を支えられ、持ちこたえた・・・ちよっと、近くないか？

「わっ！ありがと。」すぐに身体を離して、取り繕うように校長室の中に足を進めた。

電気をつけようと壁を探ったが、スイッチらしきものが見つからな

い。

仕方なく窓からの光を頼りに絨毯の上に目を凝らした。（ココを一通り捜したら帰らせよう。）

初日に自分も座った革張りのソファアの足元に目をやったとき、何かが落ちていたのに気付いた。

「あ！・・・った。コレじゃない？」

拾い上げると、シンプルな黒い定期いれであることが分かる。

隅のほうに某有名海外ブランドのロゴが刻まれているのに気付いた。
――高校生のクセにブランド品とは生意気な……。無意識に思
いながら、少年に手渡す。

「ああ、コレだ。ありがとうございます。」

定期入れの裏表を軽く見遣り、少年は晒った。

「じゃあ、早く帰ろう。」急いで部屋を出ようとした・・・が、少年に二の腕を掴まれソファアに引き倒された。

「ちょっと、何！？」身を起こそうとするが、叶わない。

少年は私の腕を押さえつけたまま、片膝をソファアについて私を覗き込んでいた。

「大事なモノ、見せてあげるって言いましたよね。」言いながら、片手で器用に定期入れから何かを取り出した。

「・・・・・・？なに、ソレ？」見たことないものだった。

銀色に包まれた5cm四方の平べったいモノ。

「見たことないの？今までのカレは使ってくれなかったんだ？酷いな。」

少年の晒いと、ソファアに押し付けられた状況から、少年の意図したことを察して・・・ブルリと大きく身体が震えた。

――知るか！？中学の保健体育で使い方をならったものの、本物を見る機会はなかった。

そして次の思考に移ることを脳が激しく拒んでいた。

「つてまさか・・・わざとこんな・・・？」コレのためにこんな茶番を・・・？

最後まで言葉は出てこなかった。

「そう♪最初は保健室にしようかと思ったんだけど、あまりにも味気ないかと思っただけ。ちよっとオヤジ臭いけど、我慢してね？」言いながら、歳の割には華奢な身体が圧し掛かってきた。
ダンディー校長はオヤジ臭くはない。

ただ整髪料だか香水だかの香りが校長室には漂っていた。

第十三夜（前書き）

※年齢制限有り、ご注意ください。

第十三夜

エアコンを切った部屋の革張りソファは冷たく、少しベタついていて気持ちが悪い。

予備校講師初日に3人の男子生徒に襲われたときは、混乱しながらも力いっぱい抵抗できたのに、

今は身体は凍りつきながらも思考は酷く冷静だった。

あの時は目の前の少年が助けてくれた。

しかし今は人がくるはずもない時間帯。

――絶望的だった。

思えば私は普段気が強い女王様の性格を演じているくせに、肝心なとき（男に襲われたとき）はいつも何も抵抗できていなかった。

ただギュッと貝のように身を縮こまらせ、相手が諦めるのを待っていただけなのだ。

あの初日に抵抗できたことの方が奇跡だったろう。

でもこの少年は・・・諦めるなんてしなそうだ。

今までの気持ちを押し付けるために抱きしめてきた奴等とは違う。

あの3人と同じように・・・気持ちなど関係なく『奪う』ためにやっているのだ。

いつそこまでの恨みを買ったのだろうか？本当に、最近の若者はよく分からない。

思考が現実逃避のために冷静に空回っている間に、少年は身体全体で押し掛かり、口付けてきた。

清涼感のある息が、口内を蹂躪する。

・・・そんなことをされると、脳内がボヤける。

あの時と同じように、ソコを中心にまるで融けて一つになっていく錯覚に襲われる。

その内シンとした校長室に水音を響かせながら、少年はブラウスの上から微かな膨らみに掌を這わせてきた。

一頻り揉み上げると、ブラウスのボタンを上から外していく。

慣れない事に手を焼きながらやっと肋骨の辺りまで外すと、手をスルリと滑り込ませ

ブラの上から確かめるようにヤワヤワと触れた。

その強引で容赦ないキスと、優しい手つきのギャップに、現実にはサヨウナラした私は気付けなかった。

ブラから手を外して鎖骨をなぞり、（微かな）胸の谷間をさまよわせ、ゆっくりとブラの中に侵入してきた。胸の丸みを感じるように掌で全体を包んだ後、頂を指の腹で擦られた。

「んんっ！・・・はあ。」私の口はまだ、彼に塞がれていたがそれを合図に、口内を蹂躪していた舌を見せ付けるようにゆっくりと顔を離れた。

「感じた？」余裕たっぷり身体を一旦離しながら自身のシャツを脱ぎ、メガネを外してソファの下に放り、すぐに首筋に吸い付いてきた。

チュチュツとキスされたかと思うと耳朶を甘噛みされ、身を竦める。その間にも指は両方の胸の頂を緩急つけて摘んでくる。

「ん、あ・・・やあ。」自分でも分かるほど声が高くなっていて、その恥ずかしさが更に自分を追い詰める。

「桜井センセイはココが好きなんだ？」

「っんう！」一際強く抓られて反射的に大きな声を出してしまった。そして耳を弄っていた舌がっーっと下へ降りてきて、今抓ったトコロをやさしく突いた。

チュツ、クチュ、ニチュ・・・

殊更大きく音を鳴らしながら両房を舐めたかと思えば、その感触を確かめるように顔を擦り付けてきたりした。

殆ど意識を手放し、襲ってくる快感をシャットアウトしていた時、それまでと違うところに違和感を感じて見遣ると、彼はいつの間にか片手をスカートの裾から入れ、私の臀部を揉みしだいていた。

その内、その手は前に回り、ショーツの上から谷間に指を滑らせた。

第十四夜（前書き）

※鬼畜ムリヤリです。ご注意ください。

第十四夜

私は弾かれたように意識を取り戻し、彼の肩を掴んで目一杯引き剥がそうとした。

「ダ、やめて！・・・お願い！！」

一瞬身体が離れ、彼と目が合った。その目は・・・宇宙みたいに暗くて、マグマみたいにドロリと燃えていた。

「ムリ。ダメだよ、ココまできたら。どうしてこうなる前に抵抗しなかった？」

離れる前より身体をグツと密着させて、腰を押し付けてきた。

ソコは何か入ってるのかと思うほど硬くて・・・私は身体を硬直とさせてしまった。

その間に彼は銀色の包みを破り、中身を少々手間取って装着した（始め裏表を間違ったようだ。）。

一連を見ながら、硬直した身体はそのまま絶対零度まで冷えてしまった気がした。

ウソでしょ、ムリでしょ。あんなモノ・・・。

私の中に無駄な空間などない。元々あった内臓を押しつけて入れる体積ではない、とカシオミニと化した頭が弾き出した。（※カシオミニ・・・世界初の個人用電卓）

彼は私の身体が動き出さないうちに、私をソファに縫いつけ、シヨーツを引き剥がした。

スカートを履いたまま私の足は大きく広げられ、身体がメチャクチャ硬い私は呻いた。

膝裏を持たれて局部に例のモノをピタリと当てられ、息が止まったとき、

上から体重をかけられ、

今まで体験したことのない様な痛みを持つて

・・・身体が引き裂かれた。

「つつきつつ。何コレ、全然進まない。」顔を歪めながら彼は呟いた。

私は息を吸うことも吐くことも出来ず、身体を強張らせて目をギュッと瞑っていた。

苛立たしげに自身の根元を持ち、グイグイと突き立てる。

「つつっ!!!」本当に痛い時というのは、声なんて出ないことが分かった。無駄な神経を使えばそれ以上の痛みに襲われるため、息が自然浅くなる。

その時、彼の動きがピタリと止まった。

動きが止まり、痛みも麻痺して薄く目をあける。

「なん・・・だ、コレ？」彼は薄明かりの中、自分の手をマジマジと見ていた。

「センセイ。もしかして・・・初めてなのか？」信じられないというように、顔を覗き込んできた。

・・・気付いてくれましたか。そうです。初めてですよ、先生は・・・!! (怒)

悪かったな、23歳にもなって付き合ったことなくて！処女で!! 何だか恥ずかしくて早く捨てたいと思ってたけど、こんな風に奪われる羽目になるとは・・・!

この時初めて目頭が熱くなった。視界がぼやけて、心の中では罵詈雑言吐いていても声が出せなかった時・・・優しく、抱きしめられた。

「・・・ごめん。乱暴にして。でも、センセイの初めて・・・貰うよ?」

もう遅いだろうが!?!とツツコミを入れていると、彼は再び圧力をかけてきた。

但し、ゆっくりとほぐすように。

「!?!?!」思わず両腕を回し、彼の首にかじりついた。

「センセイの中・・・きつくてこれ以上入らないんだ・・・力抜いて。」

なだめるように臀部をさすりながら力を入れてくる。・・・また少し、深く入ったことが分かった。

初めとは比べ物にならないほど優しく、時には宥めすかして、時間をかけて漸く総てが収まった。

彼は一息ついたが、私の身体は痛みに苛まれている。

「ん・・・暖かい。すぐイキそう。」端正な顔を歪めながら、すでにユルユルと腰が動いている。

その内揺さぶりは大きくなり、私は必死でそれに耐えた。

「ん・・・! ヤバ、気持ちいい。センセイ・・・し・・・の、しの! 志乃!」

心臓がギュッと握りつぶされた。年下に呼び捨てにされるなんて・・・なんて生意気なのだ!

でも、私の名を呼び続ける少年に、何とも言えない感情が芽生えていた。

一際大きく奥を穿った後、彼は息を切らして暫く動かなかった。多分射精したのだろう。

やっと終わったことにホッとして、彼の汗ばんだ背中中に手を這わせた。

私の首筋に顔を伏せていた彼は不意に頭を起こし、此方を見つめてきた・・・かと思ったら、

顔を逸らし、ゆっくりと私から自身を引き抜いた。

ズルリという感触に眉をしかめながら起き上がり、身支度をした。

体中がダルくてうまく立ち上がれなかったが、彼が手を貸してくれるて立たせてくれた。

そしてまた、抱きしめられた。・・・男の人って抱きしめるの好きだなぁ。とボンヤリかんがえていると、耳元で彼が囁いた。

「・・・痛くしてゴメン。志乃。好きだ。俺のものになって。」

まるで懇願するような甘い囁きに、いつの間にか止まっていた涙がまた同じ道筋を通った。

side 透 第十一、十二夜

・・・外は雨が降り始めたみたいだ。

志乃を待ち伏せながら、聞こえてきた雨音にボンヤリと耳を傾けた。

+++++

「私、この前新しく出来たメキシコ料理屋さんに行ってみたいです。」

女講師の妙にはしゃいだ声でふと目を覚ました。

時計を見れば、もう授業も終わり講師達も帰り始める時間になっていた。

自分もそろそろ帰ろうと、ボーっとした頭で立ち上がったとき、あの女の声が聞こえた。

「いいですね♪マティス先生もそこでもいいですか？」

「ああ。行こうか。」

自分一人になっていた教室を出ると、志乃と春日とマティスが3人で鞆を持って歩いていた。

不思議な組み合わせだが、3人で夕飯でも食べて帰るのだろうか？何気なく見遣って、ギクリとした。

一見3人楽しげに話しながら歩いている。しかし、一歩後ろを歩いているマティスは春日の話に応じていてもその目はしかと、志乃に縫い付けられていた。

その目線の熱さは普段の授業や、群がる女共から質問を受けている時とは比べ物にならないほどだった。

しかし志乃はそんなマティスに気付いた様子もなくズンズンと歩い

その姿は、2人の関係はまだ一方的なものであると予感させ、胸を撫で下ろした。

マティスが女の関心を異常に引く容姿をしているのは周知のことだった。

それに例え5歳しか離れていなくとも、志乃は大人の女だった。いつマティスの感情に気付き、応えないとも限らない。・・・すぐに行動しなくては。

+

・・・遅い。もしかしてタクシーで帰ってしまったのだろうか？
いや、いくらなんでももう家に男を上げることの怖さは知っている
はずだ。

それとも、一悶着あって両思いになってしまい、自宅以外のところに向かっているとか？

「こんな時間に何をしているの？」

顔を上げると、肩を濡らした志乃が怪訝な顔で此方を見つめていた。待ち焦がれた人間の登場に、思わず足が動いた。その時初めて立ち過ぎて足が棒のようになってしまっていたことに気が付いた。

夜の予備校までの道を歩きながら、後ろから志乃を見つめる。サイドに結んだ髪型は彼女の白く細いうなじを晒していた。

ガンガンとおよそ女らしくない歩き方をしながら、自ら罠に急ぐ彼女に笑いがこみ上げる。

もう少しだ。もう少し・・・。

暗いロビーに入ると肩をそびやかす様子に、意外と怖がりであることを知る。

『きゃー、コワイイ!』などと言いながら掴みかかってくる女共には（絶対怖くないだろ・・・）と辟易したこともあったが、小さな物音にも敏感に反応する志乃は普段とのギャップもあり、とても新鮮に可愛らしく感じた。

（年上の女にカワイイなんておかしいか。）

ロビーを隅まで見回した志乃に、今夜のラストステージの舞台を告げる。

志乃は早く言えよという様な顔をしたが、すぐにそこに向かって歩き始めた。

校長室に入ったとき、バランスを崩した志乃を後ろから抱きとめる。濡れた髪から立ち上る匂いと、小さく華奢なくせにフワリとした身体が全身の感覚を異常に刺激していた。

興奮しすぎて鼻血が出そうになりながら、志乃が定期入れを見つめるのを待つ。

定期入れを渡し、さっさと出て行こうとした志乃の腕を掴んでソファーに押し倒した。

（そうはさせるか。）自らのシナリオを変えるつもりなど、ない。逃げないように押さえつけたまま、定期入れから重要なアイテムを取り出す。

都合よくこんなモノを持っているなんて、なんて幸運なんだと思

ラッキー

自嘲的に晒った。

これを渡した人間はこんな風に使うなんて想像してなかったろうが・
・。

s i d e 透 第十三夜（前書き）

※年齢制限あり。ご注意ください。

side 透 第十三夜

+++++

『高松の人間として、面倒なことは起こさないように。』そう冷めた声音で言いながら渡してきた。

反吐が出そうになったが、薄く晒いながら受け取った。

こういう態度を目の前の人間が嫌がることを知っていたからだ。

汚らわしいとでもいうように眉をしかめたのを見て、更に笑みを深めた。

+++++

ゴムを取り出し、これ見よがしに目の前に掲げたが、彼女は怪訝な顔をしただけだった。

「見たことないの？ 今までのカレは使ってくれなかったんだ？ 酷いな。」

コイツの身体を、ベタベタと触った奴がいると思うと虫唾が走ったが仕方ない。

23歳にもなれば、1人や2人経験していてもおかしくない。

不愉快な想像を振り払うように彼女に押し掛かる。

ココまで来て、志乃は透の思惑に気付いたように顔色を変え、身体を震わせた。

・・・もう遅い。それはさながら蜘蛛の巣にかかった蝶。

従来の威勢のよさが息を潜め、腕の中で縮こまる志乃の顎をあげさせて唇を吸った。

以前の記憶をなぞり、次第に舌を彼女の中に侵入させる。

かすかにアルコールの香りがした。1杯だけ飲んだと言うところか。

その香りごと味わっていると、段々志乃の身体から力が抜けていくのがわかった。

柔らかくなった身体に気を良くし、最も軟らかいであろう部分にソツと触れた。

初めて触ったそれは・・・慎ましやかなものだった。

よくTVや写真で見るとようなソレとは較べてはいけないのだろう。きつと。

片手で足りる大きさのソレは、しかし想像以上に軟らかい。いつまで揉んでいても飽きなそうだったが、温もりを感じたかった。

シャツのボタンを片手で外していく。小さなボタンは操りにくく、途中イライラした。

全部外して彼女の上半身をはだけさせたかったが、気が急いて早く彼女の肌に触れたくて断念した。

初めはブラジャーの上から・・・大きめのフリルがついたソレはふんわりとしていて、胸の感触を伝えてはこなかった。

丁度目に映った綺麗に浮き出た鎖骨に指を滑らせる。（軟らかい・・・。）

サラサラとして肌理の細かい肌が気持ちいい。

次いで浅く影を作る谷間にツーと指を滑らせた。その熱い体温と山の麓の軟らかさに誘われ、フリルの中に潜り込んだ。

自分の身体にはない部分。骨のないソコは軟体動物のように姿を変え、離そうとすると追ってくる。

そして一番彼女が感じるであろう部分を指で探した。

（・・・硬くなってる。）思うのと同時に、彼女は高く呻いた。しかし口をふさいだままだったせいか、くぐもっている音を明瞭にするため、ゆっくりと絡み付いていた舌を外しながら離した。

少し遠ざかると彼女の目が潤んでいるのが分かる。微かな光の中で、目をキラキラさせながら此方をボウっと見ている。

（!!!・・・可愛い!）可愛すぎる彼女を全身で味わうために余計なものとは総て脱ぎ捨てた。

邪魔なメガネも外す。道理でキスしにくかったわけだ。

少し離れてみた彼女は年上ということを忘れさせるほど可愛くて、
儂くて、・・・その妖艶さにゾクリとした。

細くていい匂いを放つ首に吸い付き、軟らかくて可愛い耳朶に齒を立てると、華奢な身体に力を込めながら高い鼻声を堪えきれないように漏らす。

微妙にタイミングをずらしながらあらゆるところを刺激していると、彼女が一番感じる場所が絞れた。

「桜井センセイはココが好きなんだ？」

言いながら、胸の先をキュツと摘む。正解であることを示すように可愛い声を撒き散らした。

その声をもっと聞きたくて、手で大きく揉みながら胸の先を口激した。

突いて、舐めて、吸って、噛んで・・・ワザと大きな音を出しながら。

その間、身体を大きくビクつかせながら息が荒くなっていく彼女を感じ、大きく上下する腹を掠めて下部後方に手を回した。

s i d e 透 第十四夜（前書き）

※鬼畜ムリヤリです。ご注意ください。

side 透 第十四夜

ふっくらとした尻は、華奢な見た目にそぐわず豊満だった。

気持ちいい感触に気を良くし、脚の付け根を探ったとき、

突然彼女が身を持ち上げて、「止めて欲しい。」と懇願してきた。

どうして今更？気持ち善がっていたくせに。・・・ココまで来て拒否するなど許されない！

「ムリ。ダメだよ、ココまできたら。どうしてこうなる前に抵抗しなかった？」

勿論、抵抗されたって止める気などなかったが。

分からせてやらねばならない。自分が本気であることを！

一度膨張した自身のソレは、相手の拒否にあったところで萎えるようなものではなかった。

むしろ早く与えてくれと、つけるべきものもつけず、彼女に飛び込んでいきそうだった。

それを何とかゴムに押し込み、（なんて付けにくいんだ！？もっと裏表ハッキリ分かるようにして欲しい。）固まっている彼女を再び押し倒し、小さいクセに、頑丈に彼女の下半身を守っている下着を剥ぎ取った。

必死に閉じようとしている脚を開き、指で微かに湿っている場所を確認し、己をめり込ませた。

――入らない。先の部分が僅かに埋まっただけで、それ以上進まなかった。

そんなに濡れていなかった所為かと、またカッとなった。

自身を手で支え、一気に貫こうとしたとき、表面の滑りが手についた。

・・・？それはゴムに予め付着していたものとは違う感じがした。

よく見ようと手を顔に近づけると、ツンとした鉄の臭いを感じ、微かな光の中にある手は指先を紅く染めていた。

一瞬ギリとし、次いでどう頑張っても入らなそうな感じと、直前の悲壮な叫びに思い当たる。

「……まさか……。体中から血の気が引き、確かめずにはいられなかった。」

「センセイ。もしかして……。初めてなのか？」

彼女は一瞬の内に様々な感情を過ぎらせた。悲しいような、悔しいような、恥ずかしいような……。

でも声にならなかったようで、蒼白だった顔を赤く染め、睨みながら大きな目玉を零れ落ちんばかりに潤ませながら、睨んできた。

「……反則だろ、その顔。」

可愛すぎる彼女に痛い思いをさせないよう、力を込めないよう抱きしめてから、宣言した。

「……ごめん。乱暴にして。でも、センセイの初めて……。貰うよ？」

そう。まだ全部入っていないとはいえ、こんなところで止められないし、彼女の初めてのオトコという称号を逃す気は更々なかった。むしろ、最初で最後になってももらわないと、困る。

自分にとっても、彼女をそうするであろうことを決めたのはきつとこの時だ。

まだ形になっていないボンヤリとした感情は、この後徐々にハッキリと姿を持つてくる。

荒々しく入れてしまった先を、今度は慣らすように押しでは退き、退いては押しでは中を拡げるように腰をグラインドさせる。

耐えるようにギュッと縋り付いてくる様子が爆発しそうなほど可愛くて、息が止まったり、苦しうに呼吸が荒くなる彼女の背中を撫でながら、少しずつ進んでいった。

入れている最中は必死だったが、総て入ってしまったと、今度は緊迫した状況に陥った。

彼女の中は暖かく、四方八方から圧力をかけてきた。

意識してるのかしてないのか時々ギュッと絞ってきて、動いても動かなくても先は見えている気がした。

それでも動くと、少しづつではあるが出てきた彼女の体液によって滑り、頭の中がチカチカした。

・・・ヤバイ。気持ちよすぎる。

慣れない動きに腰はすぐダルくなったが、気にしていられないほどの快感が襲ってくる。

目をギュッと瞑って耐えている風の彼女に罪悪感を感じながらも、愛おしさがこみ上げ、それを自覚するほど切羽詰ってきていた。

山に登りきる直前、それまで痛みに耐えるようだった彼女の呻きが熱い吐息になったのを感じ、

それに背を押されるように一気に奥を突き上げた。

「――――っあ!!」

頭の中の瞬きがスパークして目の前が真っ赤に燃えた。

射精の余韻は暫く続き、欲を吐き続けていたので、その間彼女の匂いを取り込んでいた。

その時、彼女が自分の背に手を回してきて恐る恐る宥めるようにさすってくれた。

・・・こんな目に合わされてまだ優しくしてくれるのだろうか？

同情なのか、また逆上されないようにとの恐れからなのか、それとも・・・。

彼女の真意を量るため、目を合わせたが純粹そうな瞳からは何の感情も読み取れなかった。

それよりもその視線に耐えられず、目を逸らして漸く彼女の中から自身をソッと引き抜いた。

いくら好き勝手していても、このゴミを捨てていくわけにはいいかな。

中身が零れないように結んでティッシュに包み、厭々ポケットにつっこんだ。

忘れないように途中で捨てなければ大変なことになるだろう。

慣れない作業に手間取っている内に彼女はサッサと片付けを終えたようである。出来ればソツと拭いてあげたかったが……。

そしてうまく立ち上がれなそうな彼女に手を貸し、そのまま離れない様に抱きしめて首筋に顔を埋め、また彼女の匂いを吸い込んだ。そして今強硬手段に出たことを詫びなかったら、一生その機会は訪れないように感じていた。

「……痛くしてゴメン。志乃。好きだ。俺のものになって。」

口は本題以上のことを紡ぎ、本心を吐露していた。

どうして懇願してしまったのだろう？

例え拒否されたとしても、今と同じように強引に奪い、自分のことしか考えられないようにしてしまう確信があったのに。

何の応えもないことを不信に思い顔を上げると、彼女の瞳は再び蕩け出てしまっていた。

第十五夜（前書き）

大分間があいてしまい、申し訳ありません。汗

第十五夜

痛い・悲しい・悔しい・辛い・恥ずかしい・・・どれも当てはまる
ようで、しっくりこなかった。

ただただ止めどなく流れていった。

後で思い出すと恥ずかしい話だが、私は彼に縋り付いて泣いていた。
・・・いや、抱きしめられたのかもしれない。

どちらにしてもよく覚えてないが、振り払わなかったのだからそう
大差はないだろう。

『俺のものになって・・・』

こんな傲慢な言葉をなんて切実に言うのだろう。

それが何だか可笑しくて、泣きながら笑った。
抱きしめる腕に一層力を込めて、彼も笑った。

私達はこの時、無言で互いを慰めあっていた。

+++++

「・・・・・・・・・・あつっ！勉強する気になれないんですケド。」
当たり前だ。今は7月も末。梅雨明けはしたものの、日本の夏は湿
度も温度も高いものである。

「では学校に行きなさい。クーラーが効いてて涼しいし、効率よく
勉強できるんじゃない？」

半眼になって、我が家に居座っている小僧を睨み付けた。
あまり片付いてない部屋に他人に居座り続けられるのは嫌なもので
ある。

片付ければいいことは自分でも分かっているのだが・・・。

「せっかくクーラーつけてるんだから、もう少し温度下げようよ。脱水症状になる。」

確かに今年は猛暑だ。梅雨時期は寒いくらいだったのに、それが嘘のように連日夏日である。

「勉強したいって言うから、上げてあげたんだから、勉強しないなら帰ってちょうだい！」

勉強する場所はちゃんとあるのだから、私の貴重な休みを潰さないでくれ！

+++++

あの雨の日は私にとってある意味忘れられない日となったが、アレ以来なついたように擦り寄ってくる透を私は何故か拒めないでいた。

しかも予備校内では知らん顔しているクセに、

帰り道待ち伏せ作戦など古典的な技を使って家まで着いてくるのだ。

最初は無視していたが、ドアの外で物言わず立ち尽くされ、ジッとドアを見詰め続ける

少年の見えない恐怖に根負けし、家に上げてしまったのが運の尽きだったと言える。

それから大分経ち、透が私の家にいる時間は段々と長くなっていった。

そうして今へと至るわけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1853q/>

生意気メガネ

2011年4月15日23時52分発行